

五月最後の日

矢 沢

宰 おさむ

私の手は糸束をにぎり

君の手はせわしく糸玉を舞う

その手と共に

君の小さな口もとは

小雀が餌をあさるように動く

私は君の言葉をはにかんで受ける

朝飯前の一時 ひととき

夜来の雨はからりと晴れ

五月最後の空はどこまでも

青く輝き

庭の木や草々は

若い生き生きとした息を放つ

風は ポプラの小枝をわたり

部屋のシャクシャクの白い花を静かにゆする

君は立って

私は寝て糸束をにぎる

五月生れの詩人、矢沢宰の詩集『少年』から五月の詩をえらびました。十五歳の時の詩です。一九六六年三月十一日、二十一歳の生涯を終わるまで、病氣とたたかひながら書きためた詩のかずかずは、先に出版されました『光る砂漠』でおなじみの方も多いことと思います。

この『少年』は昨年秋にご紹介しました、ブッシュ・孝子の詩集『白い木馬』について、同じように周郷博先生編で、秋に出版されました。あとがきに先生は、

「十四歳の十一月三日から一日も欠かさず書きつづけた『日記』と、初めは俳句やペン画、いたずら書き、間違ひ字が目立つ、詩を書きつけた帖面が十九冊―中略―貧しい帖面に、寝ていて詩(のようなもの)を書きはじめていた。その「入り乱れた文字」を追っていくと、「ざらざらすることは(詩)がそこにみつかる」と書いておられます。

周郷博編矢沢宰詩集『少年』サンリオ出版より